
我は誓う、剣に友に

十海 with いーぐる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我は誓う、剣に友に

【Nコード】

N8543Z

【作者名】

十海 with いーぐる

【あらすじ】

人間族の若者グレンは幼い頃、崩れた崖で錆びた剣を手に入れた。^{ザハール}初めて見るはずなのに、何故だかひどく懐かしく、いつも背中に背負って大事に持ち歩いた。月日が流れ、一人前の鍛冶職人に成長したグレンは自らの手で剣を鍛え直す。のみならず、己の剣に名を与え、魂を分かつ『絆の誓い』の儀式を行おうとしていた。時を同じくして闇の中、平和な村を屍闇に染めようと、不気味に蠢く影が迫りつつあった……これは、英雄の魂を宿した『普通に生きる』人々の物語。 本作は、新紀元社より刊行されたTRPG「バルナ・

クロニカ」及びサプリメント「ナジャ・イストリカ」（著：小林正親）の世界観とシステムをベースに作成しました。登場するキャラクターは、いずれもバルナ・クロニカのルールに基づき作成したものです。世界の成り立ちや神話、仕組みなどは作中できちんと説明し、元となったTRPGをご存知ない方でも、普通にファンタジー小説としてお楽しみいただけるよう心を砕きました。色褪せた大地を踏みしめて、鮮やかに今を『生きる』人々の織りなす、骨太な物語をご賞味ください。

序章（前書き）

・ 作中におけるルールの解釈、適用はあくまで個人の解釈によるものです。

・ くれぐれもこの件について、新紀元社および著作者の小林さんに問い合わせる事はお控えください。

序章

遙かな昔。

虚空を渡る始祖たる風が、想いえがいて形をつくり、六柱の聖霊が生まれた。

聖霊たちもまた想い、えがいて形をつくり、ルラーラ現界とそこに住まう命を創った。

しかし。

現界の住民は自らの守護者たる光の聖霊に反旗を翻し、それ故光の聖霊は悲しみとともに彼らを光の槍で貫いた。

この時から現界には、心魂の欠けた四つの種族と何も失わなかった一つの種族、そして屍闇の王が存在する事となる。

賢明さを失った戦人族^{ドゥオルグ}。

希望を失った長命族^{エルフィン}。

オウガ・アザレラ鬼面族は生まれながら愛を知らず、ココスレ勇気を失った笛小人族は自らの影をも恐れて逃げ惑う。

だが唯一、人間族^{ザハール}だけは何も失わず、故に他の種族から嫉まれる運命となる。

ザハールが失ったのは、『信頼』と言う絆なのかも知れない。

希望^{ナジャ}の灯火。

遠い昔、生きとして生ける者全てを屍闇の王から守るため、自ら輪舞に身を投じた勇氣ある者たち。この世に屍闇の王が再臨した時、彼らもまた、生まれ変わる。

その身に光の聖霊より授かりし証??シエン刻印を抱いて。

彼らの中には、自らが信じ、命を預ける己の武器に名を付け、永遠の絆を誓った者たちがいる。剣、斧、弓、あるいは槍、そして盾絆を誓い、武器の内に眠る心魂バルナを呼び覚ました者たちは誓いジエンギレし者と呼ばれた。

誓いし者を失った時、心魂目覚めし武器は眠りにつき、ただのモノに戻ると言う。

眠れる武器と転生の英雄。

もしも、再び彼らが出会ったら？

最後の屍闇の王の出現より既に1200年。

不屍の魔物と妖鬼の恐怖は記憶の底に沈み、希望の灯火の存在もおとぎ話に名残を留めるのみとなった今……。

答えを知る者は、まだいない。

【1】夜に走る

男が走っていた。

まだ夜も明け切らぬ荒野を、葉っぱの尖ったの、丸いの、蔓巻くの……腰の高さまで伸び茂った、堅い草をかき分けて。亜麻色の髪は汗に濡れて額にへばりつき、うっすら無精ヒゲに覆われた口元は引きつった笑みの形に固まっている。

男は必死で走っていた。

夜露に湿った草がまとわりつき、今にももつれそうな足を更に鈍らせる。必死で走っているのに、なかなか体が前に進まない。さながら、寝苦しい夜の悪い夢。

だが、現実だ。

皮膚を伝う冷たい汗の玉も。ぜいぜいと耳奥で轟く息の音も。渴いて張り付く咽の奥、冷えた息は胸の奥に刺さり痛む。そして……腕の中で暴れる小さな生き物一人。

「イーーーーーヤアアアアア！」

白目のほとんどないすみれ色の瞳、兎を思わせる鼻面の尖った愛くるしい顔。長く編み垂らしたトウモロコシ色のお下げが、ぶんぶんぶんと派手に揺れる。

「落ち着け、落ち着けつつのネイネイ、こら、暴れるなっ」

「イーーーーーヤアアアアア！ 怖い、怖い、怖いーっ」

「^{フルクン}笛小人族の娘は完全に取り乱していた。普段からは信じられないような力で暴れ、手足を突っ張る。」

予測不能の動きでびくん、びくんと強烈に揺さぶられ、ちよつとでも気を抜いたら最後、手からすぽんつと飛び出しそうだ。それはすなわち、今の状況下では彼女の死を意味する。

横ざまに揺さぶる動きは自ずと前に進む妨げとなり、走る速度を鈍らせる。

元々腕力に自信のある方ではない。加えて、四十路を超えた身にはきつい仕事だ。一足前に蹴り出すことに体の節々がきしみ、骨が、肉が悲鳴を挙げる。

「ちくしょう、このままじゃあつ」

ぞ、ぞぞ、ぞあ……。

生ぬるい風が吹き抜け、腐肉の匂いが一段と濃くなった。

来る。草をかき分け、追っ手が迫ってくる。息も乱さず、着実にこちらら生身の人間だが、あいにくと向こうは切れる息も、痛む心臓も持ち合わせちゃいないと来てる。初手から分の悪い追いかけっこ。だが、降りるつもりはさらさらない。

それでも苦し紛れに悪態の一つ二つは吐きたくもなる。

「あー、もう。何で俺、こんなことしてるんだらうなあ……」

ほんの数時間前、男は雪姫川を下る川船に乗っていた。

【2】川を下りて

エルプリンツェザ・イバイ
雪姫川のほとりの色合いは、幅10ルット(30m)ほどの水を挟んで南と北で、すばつと二つに分かれている。

南岸は幾本もの水路が引かれ、拓かれ、耕され、ふっさりと伸びた麦と稲が穂を揺らす。風が吹くたびにさやさや、ざあつとしなやかな、青い波が走り抜ける

片や北岸には人の手はほとんど入っておらず、カンタアリ・ガイラ残歌の戦い以来の手付かずの荒れ地が広がっている。茫々と生え広がる丈の高い草と絡み合う木々の枝葉が褪せた緑の壁となり、水際近くまで押し寄せていた。

この地の開拓が始まって40余年、村も人も増えた。しかしながら、エマン・エルム大荒野は依然として人が生きるのに容易い土地ではないのだ。

船が下るにつれて、川岸に刻まれた人の痕跡は徐々に濃くなり密になり、草を食む牛の姿がぼつぼつと増え始める。

ほどなく、行く手にアンヘイルダールの『北の見張り塔』が見えてきた。

ここを越えれば、もう村の中だ。

川舟の乗客たちが荷物をまとめ、降りる支度を始める。男は船底に置いたふた付きの籠を持ち上げ、ベルトを肩にかけた。

一抱えほどもある大きな四角い籠の中には、川上の山で採取した薬草が詰まっていた。

「よつこらせつと」

たかだか草と言えども、集まればけつこつな重さになる。思わず

知らずもらした掛け声に、我ながら年よりくさいと苦笑がにじむ。重ねた歳月に嘘は着けぬ。四十の坂を越えた頃から何かにつけ、がくつと段差を踏み抜いたような、体力の衰えを感じていた。

(こつして、季節ごとに薬草採りに出てこられるのも、あと何年かね……)

ゆらありと船が揺れる。決して激しくはなく、あくまでゆるやかな動きで。

流れが変わったのだ。

船は雪姫川と薄雪川エルル・ウガルテの合流点にさし掛かりつあった。

ふさふさと黒いヒゲを蓄えた船長は、巧みに流れを読み、舵を取り、船を棧橋へと寄せて行く。

程なくこつん、と木と木が触れ合い、振動が足下に伝わって来た。すかさず舳い綱が投げられる。待ちかまえた船着き場の人足が受け取り、杭へとくくり付けた。

渡し板なんて気の利いたものはここでは使わない。船べりを乗り越え、すたん、と棧橋へと降り立った。亜麻色の柔らかな髪が揺れる。すたすたと歩いて棧橋を渡り、岸へと向かう。ぐずぐずしていたら、荷下ろし荷積みの邪魔になる。

「つしよつと……」

どっしりと動かない大地を踏みしめ、男は大きくのびをした。体中の骨がぼきぼきと、小気味の良い音を立ててほぐれて行く。

彼は体の大きな……所謂、偉丈夫ではなかった。背は小さく、手足胸板足腰の肉付きは、がっちりと言うよりむしろ、むっちり。外見の語る通り腕っ節もさほど強くはない。

二重瞼のぱつちりした目元、顔にはほとんど皺らしい皺はなく、肌もつるりと滑らかで、顎を覆う無精ヒゲさえなければ少年と言っても通じるだろう。

だが、愛想笑いを絶やさぬ口元とは裏腹に、蜂蜜色の瞳は終始油断なく辺りを見回し、内側に宿る光は鋭い。

身のこなしは猫のようにしなやかで、それなりの場数を踏んで生き抜いて来たことを伺わせた。

この男、名をハーティアル・ジェムルと言う。通り名はハーツ、小さいながらも、サガルロンドの裏通りに店を構える薬草師だった。

エルルタンタからの帰り道、彼がわざわざ遠回りしてこのアンヘイルダールの村に立ち寄ったのには、理由があった。

一つはここがめっぼう食い物の美味しい村であること。そしてもう一つは……。

「さあて、久しぶりにグレンの坊んの顔でも拝みに行くかね？」

誰にともなくつぶやく刹那。懐の奥深くしまい込んだ小袋が、微かにしゃり……と鳴った。

【3】大鍋亭にて

船着き場を出て東に歩き、円形の広場へとさしかかる。

ここは南の門からの道と、船着き場からの道の出会う場所。村で一番、賑やかな界限だ。

新鮮なバターをたつぷり乗せた蒸かしイモ、あぶった腸詰め、丸パン添え、魚のフライと揚げたイモ。所狭しと軒を連ねる屋台の前を通り過ぎ、まっすぐに『大鍋亭』へと入る。

ここはアンヘイルダールの唯一の居酒屋兼宿屋。ハーツが村を訪れる際の定宿であり、相棒との待ち合わせ場所だった。

『まずは鍋より始めよ』

店に入ると真つ先に、暖炉の上の壁に刻まれた碑文が目に入る。その言葉通り、奥の厨房では特別あつらえの巨大な鉄鍋がくつくと湯気を立てていた。

既に5の鐘が鳴り終わり、昼食の混雑は徐々に収まりつつある。だが、それでも店が賑わっていることに変わりはない。

空気がうねっていた。

人間、^{ザハール}ドヴォルグ、エルフィン。体中くまなく衣服で覆い隠し、決して帽子を脱がない、仮面の奴ら……^{オウガ・アザレラ}鬼面族。

それぞれが喋る言葉が異なる響きを奏で、ミツバチの羽音のさながらにわぁんと飛び交っている。

種族、性別、年齢。あらゆる色が入り交じり、使いさしの絵の具皿みたいな客席を見回していると……。

「お？」

カウンターの向こうから、とんがり帽子が近づいて来る。えっちらおっちら左右に揺れる帽子は、賑やかな幾何学模様で彩られていた。

「んっしょ、んっしょ……」

木の転る音がする。どうやら、帽子の主は踏み台を上っているようだ。ほどなく、先端に毛房の生えた長い耳が。次いで鼻柱の低いとがった顔が、ひょこつとのぞいた。

トウモロコシ色の長いお下げ髪が揺れる。

「おまちどおつ、『今日の煮込み』と揚げパンの定食、あがったよー！」

「よっ、ネイネイ」

カウンターに歩み寄り、軽く手を掲げてご挨拶。

白目のほとんどない、愛くるしいスミレ色の瞳がこちらを見る。途端に、兔めいた顔に、ぱあつと極上の笑顔が花開く。

「おじさんっ、おじさんっ、薬草屋のおじさんっ！」

「元気そうだな」

「うん、すつごく元気！ 何食べる？ 今日も美味しいよ！」

「そーかそーか。修業がんばってるんだな！ 定食一つ頼むわ」

「りょーかい、定食一つねっ」

「それと……赤毛の鍛冶屋が来てると思うんだが」

ぴこぴこ、長い耳がゆれる。

「鍛冶屋さん。鍛冶屋さん、いるよ？ ほら、あそこ」

指さす方向を見れば、確かに。隅っこのテーブルに、がっちりした体格のザハールの若者が腰かけていた。鮮やかな赤毛を師匠に倣って長く伸ばし、端をきつちり三つ編みにした男が。

「おー、いたいた。ありがとな」

「どーいたまして！」

ネイネイは時々、音をいくつかすっ飛ばす。どうやら、人間族の言葉は、彼女の口の動きに追いつかないようなのだ。

幸い、赤毛の青年のテーブルには空席があった。それとなく近づき、すんと真向かいの椅子に腰を降ろす。

「んあ？」

揚げパンにかぶりつく動きが途中で止まった。

「あいつかーらず、隅っこの好きな子だねえ」

んぐつと飲み込めどし、お茶でがぶがぶと流し込んでいる。

目を白黒させつつ、どうにか口の中のもの片づけると、赤毛の鍛冶屋は白い歯を見せ、顔が真っ二つに割れそうな勢いで笑みかけってきた。

「よう、ハーツ！」

「よう、グレンデール」

「だーっ、その名前で呼ぶなっつってんだろ？」

途端に口をひん曲げて、不満げに鼻を鳴らす。

「長いし。音、ひねって引っ張る感じがだらーっとして間抜けくさい」

「わかったよ、グレン」

「……ん」

それでいい、とばかりにうなずいている。まったく、こつ言っ所はいくつになっても子どもだ。可愛いやらおかしいやらでつい、顔を合わせるたびに同じやり取りを続けている。

知り合ってこの方6年、飽きもせず。サガルロンドの城壁の、漆黒に輝く『剣の門』。その傍らで出会ったあの日から、ずっと。

【4】赤毛のグレン

夕暮れ迫る門の下、やたらと手足ばかりのひよる長い、痩せた赤毛の少年が一人。布でぐるぐる巻きにした、古ぼけた剣一本抱えてぼんやり立っていた。

髪の毛はぼうぼう、服はぼろぼろ、靴は刷り切れ穴だらけ。全身くまなく埃にまみれ、ただ両の目ばかりがきらきらと、薄闇の中、燃えていた。

『よう、坊主。こんな所で何やってんだ？』

見るに見かねて声をかければ、返ってきた答えは開口一番

『鍛冶屋はどこだ？』

『……何だ、それ、修理に持ってくるのか』

『ちがう』

緑の瞳でひたと見据えられた。春先の草原を思わせる穏やかな緑だが、奥底には強い意志の光が宿っていた。

『こいつを自分で打ち直したいんだ』

幸い、鍛冶屋のギアルレイは古くからの知り合いだった。

『来いよ。案内する』

念願かなって鍛冶屋の親方に弟子入りしたものの。

なまじ飲み込みが早い上に生来のお人よしが災いし、兄弟子どもに、いいようにこき使われ、いびられて。それでも不平一つ漏らす

でなく、ただただしょんぼりうな垂れる背中を何度も見かけた。

以来、時にどやしつけ、時に励まし、あるいは黙って受け止めて何かと面倒を見るうちに月日は流れ……

あれよあれよと肩幅が広くなり、背丈も目方もずんずん増えて。鼻の周りに散っていたそばかすも消え、いつしか上から声が降ってきて。

おいちゃん、おいちゃんと子犬みたいにじゃれついてきたのも昔の話。

「……元気そうだな」

今じゃしゃっきり背筋を伸ばし、張りのある声で呼びかけてくる。

「そつちこそ生きてたか、ヒゲ親父！」

もはやすっかりタメ口だ。

がっちりした腰に斜めにかけた剣帯には、新品同様に鍛え直された、あの剣が収められている。

二ヶ月前、花の季節アシヤの初め。赤毛の青年は見事に自らの手で剣を打ち直し、独り立ちを認められたばかりだったのだ。

「今日の煮込みは何だ？」

「トマトと豆と、茄子と腸詰め」

「なるほど、だからネイネイが料理できたのか」

「トク」 笛小人族はおしなべて天性の農夫で、素晴らしい料理人だ。

しかし、若干の問題があった。彼らは『大きな生き物』が怖くて料理できないのだ。羊や牛、そして豚。肉になっても怖いものは怖いらしい。

そんな訳でネイネイは、未だに『料理人見習い』のまま。それでも日々努力を重ねた結果、なけなしの勇気を振り絞り、どうにか腸詰めまでは触れるようになったのである。

「美味そうだな」

「うん、美味しいよ」

トウモロコシの揚げパンが山と盛られた木彫りの皿を、ずいと無造作に差し出してきた。浸して食べ、と言っことらしい。

「いや、これお前の分だろ？」

「お前のが来たら一個もらう」

「ちゃっかりしてやがる」

ならばと遠慮せずに丸い揚げパンを手にとり、二つに割る。

ほこほこ湯気の立つ黄色い生地を、赤いスープに浸して口に運んだ。

「ん……いい味出してるね」

「親父くさいぞ？」

「親父だからな」

残る半分を浸し、少しずつ噛みしめる。その間に向こうはぺろりと二つ、平らげていた。大口開けて豪快に。

「ん？」

蜜色の瞳がすがめられる。ベルトに手挟んだ革手袋に、見慣れない焼け焦げがあった。

丈夫でしなやかな手袋は、手を護る防具にもなるが、本来は鍛冶

屋の商売道具だ。焼けた鉄を掴んだり、打ったりする時に、手を怪我しないようにはめるのだ。

「お前さんもつくづくマメな男だね」

「ンあにが？」

「食つか喋るかどつちかにしろ！」

「んぐ……」

トウモロコシの粉で作った揚げパンは、口の中で結構かさばる。慌ててもごもご噛み砕き、ごくりとお茶で流し込んでる。

片づいた頃合いを見計らって言葉を続けた。

「こつちに来てからも、しっかり仕事してるだろ」

「ああ、うん。鍛冶屋のメルリンが膝、傷めちまってさ。外回りだけ引き受けた」

外回りの鍛冶仕事、となれば家畜の蹄鉄打ち、農具の修理、あるいは鍋の錆掛けとか。せいぜい、その程度の小商いが関の山だろう。

「お前ね……」

思わず手を上げ、ひらでもって赤毛頭を張り倒していた。ぺちり、と景気の良い音が響く。

「いて」

「自分が何しにここに来たか、忘れちゃったってか？ 大事な『絆の誓い』の儀式の前だろーが」

「わかってるさ。でもお前待つ間、時間、あまってたから」

なるほど、一理ある。

件の儀式は特に準備が必要って訳じゃない。齋戒沐浴して肉を断て、とか。人里離れて穢れをつつしめ、とか。そんな決まりがある訳でなし。

「だからってよお……一生に一度のアレなのに、お前、そんな小商いをぼちぼちと。しかもよそ様の店の手伝いとか」

「いいんだよ。俺が、そうしたかったんだ」

そう言つて、赤毛の鍛冶屋は目元を和ませた。いい感じに力の抜けた笑顔だった。

「儀式に必要なのは、俺と、こいつだけなんだからさ」

愛おしげに、腰の剣を撫でている。

「つたく、これだから素人は……ほれ」

舌打ちして、懐から小袋を取り出した。自分で用意したものと、託されたもの、合わせて二つ。

「これは？」

「儀式に使う浄めの香草。乾燥させた白セージだ。火い炊く時に一緒に燃やせ」

「あ……ありがとう」

「必ずしも必要って訳じゃないが、場を浄めて損はなかる。それと、こっちはギアルレイから頼まれた」

「師匠から？」

「ああ」

油のついた手を伸ばしかけ、慌ててごしごしと拭っている。ただ

し、服の胸元で。苦笑してハンカチを差し出した。

「……すまん」

「いいから、ほれ、早く開けてみ」

うながされるまま、グレンは慎重な手つきで袋の口を開いた。

【5】赤毛のグレン - 2

しゃり……ん……。

澄んだ音を立てて、磨き抜かれた小さな鉄の輪が二つ、転がり出す。表面に刻まれた、連続する螺旋の輪。うねる波頭にも、伸び広がる鳶にも見えるその模様は、戦人族が好んで使う伝統の紋様……ドヴォルグ・サークルだ。

「指輪？」

「ああ。一つはお前さんの左手に。もう一つは」

ハーツは鍛冶屋が腰に帯びた剣の、柄頭の部分を指し示した。

「その、柄のくぼみに、ってな」

「信じらんねえ。あの人、こんな細かい細工もできたんだなあ」

「お前、それ自分の師匠に言うか！」

「だって、あーんなごっつい腕で、がっしんがっしん鉄の塊叩いてるんだぜ？ まさか、まさか、こんな……」

声が震えている。しきりと瞬きして、二つの輪を手のひらに乗せ、握ったり開いたりを繰り返してる。

なるほど、こいつ、嬉しいんだ。それも、すごく。

「お前さん、どんなに勧めても盾の使い方だけは覚えようとしなかつたって言うじゃねえか」

「両手で振った方が力が出せる。それに、こいつもそれを望んでる。そーゆー造りなってるんだ」

剣の柄を指先でなぞっている。

「そら、刀身の長さに対して、ちょっとだけここんとこが長くなってるだろ？ だけど決して片手で振る時に邪魔にならない。ほんとは微妙な。絶妙な比率なんだ！」

えらい意気込みだ。目を輝かせ、頬をつやつやと紅潮させて身を乗り出している。まったく、この剣の話となるといつもこうだ。

「うんうん。お陰でお前さんの馬鹿力を有効活用できるってな。もう百回は聞いたぞ、その話」

軽く押しとどめ、するりと元の流れに持って行く、その手際も慣れたもの。

「だからよ。少しでも身の護りになるようにつて、祈りをこめたそうだ」

「ああ……わかる。触れてるだけで、びびし伝わってくるよ」

グレンは指輪の一つを手にとると、左手の薬指に潜らせた。鉄の輪はするりと吸い込まれ、まるで昔からそこに在ったかのように根元にぴたりと収まった。

続いて二つ目の幾分小振りな輪を手にとり、柄頭のくぼみに近づければこちらもすうっとはめ込まれ、当たり前のように馴染んで、剣の一部となった。

「見事だな」

「ああ、さすが師匠だ」

「伊達に錬鉄のギアルレイと呼ばれてはおらんって事かね……それ、

で

ざっとハーツはパンくずを払い落とし、テーブルの上に羊皮紙を広げた。すかさずグレンが手元をのぞきこむ。

「探しといたぜ。儀式を行う場所」

「おう！」

羊皮紙には、二つの川のとアンヘイルダールの村、そして川沿いに南東に延びる小街道。この付近の地図が描かれていた。

「絆の誓いの儀式つてえのは、六柱の聖霊の力源が流れる場所が望ましいんだ。『闇の夜』に『光の月』のもと、『風が流れる』中『土の大地』の上で『火を灯し』、『流れる水』のほとりで行うのが理想だな」

「待て、待て、待てよ。『闇』の力も必要なのか？」

顔をしかめている。無理もない。こいつは元々羊飼いの子で、その後は頭の堅いドヴォルグの師匠に育てられた。ずっと『闇』は忌むべきもの、避けるべきものと教えられているのだ。

「なあグレン。『光』と『闇』は双子だ。対為す存在だ。両方が揃って始めて、力のつり合いがとれるんだぜ？」

「うー……うん……」

「ついでに言えば、闇と屍闇は別のものさね」

「うん、わかってる。それは、わかってるんだが」

納得行かないのだろう。

「屍闇は生きても死んでもいない、ただの虚空だ。厄介なのはそこ

に逃げ込んで、こっち側をじーっと狙ってる奴らだ」

「……うん」

ふーっと深く息を吸うと、赤毛の青年は目を閉じて、大きくうなずいた。

「お前がそう言うのなら、そうなんだろう」

よしよし。少年時代からの条件付けは、まだまだ健在らしい。

「それで、だ。話を戻すぞ、グレン」

「おう、話せ」

とん、と人さし指で地図の一点を指し示す。そこは村の門の外、薄雪川のほとりだった。牧草地を過ぎて、さらに南東に向かって半エルド（およそ2km）下った所。

人の痕跡が消え、未開の大荒野に分け入った場所だった。

「ここまで来ないと、ダメか」

「ああ。できるだけ人里から離れた方がいい」

「で、夜、月の出ている時刻にやれと」

「そうだ。今は下弦の月だから、真夜中過ぎることになるな」

「ふむ」

軽く握った拳を口元に当てている。真夜中にたった一人で荒野のど真ん中。大の大人でも怖じ気づく状況だが……。

「それじゃ、村の門の閉まる前に、外に出ておかないとな」

既にやる気になっている！ 奮える気配もありゃしない。自分の

身は自分で守れる自信があるのか。あるいは儀式のことで頭がいっぱいなのか。多分、その両方だ。

「日暮れ前に村から出て、月の出を待つよ」

「ああ、そうしろ……で、どうよ。剣の名前はもう決めたのか？」

「んー、いくつか候補は考えてみたんだけどな。どれもじっくり来なくって」

かさこそと懐から折り畳んだ紙を取り出した。表面にはびつちりと文字が書き連ねてある。

「ベルザーガ（白鳥）、ギルツア（鍵）、ルオイン・ベギ（獅子の瞳）、アイレン・ヒーガル（風の翼）……うん、それっぽいな」

「だろ？ でも、どれもこれも無難すぎるっーか、いまいち面白みに欠ける」

そこで面白さを狙ってどうするよ。秘かに呆れつつ次の行に目を走らせ、思わず止まった。

「この、マルリオラ（トンボ）ってのは？」

「何となく似てないか。すらーっとまっすぐな所が」

「お前ね……」

再びぺちりと手のひらで張り倒す。今度は正面から、額を。

「つてえな」

「知ってるか？ あんまりアレな名前つけようとするど、剣に嫌がられるらしいぞ？」

うえ、とグレンは咽の奥で妙な声を出し、じっと己の剣に目を注

いだ。

「……………そうなのか？」

語りかけた所で、ただの剣。返事など望むべくもない。代わりにうなずいてやった。

「そうだとも。剣ひそつちにも選ぶ権利ってのがあらあな」
「うーむ」

真剣になって剣とにらめっこしてる。生き物相手とは微妙に違うが、声に出さず親しい友と語り合っているかのような空気がそこにあった。

「ガキの頃からの長い付き合いなんだろう？ いい名前を考えてやんな」

「……………うん！」

目元を赤く染めて、照れた笑いをにじませた。

(いい顔してやがる)

つい、頭をなで回してやりたくなかったが、自粛した。こいつはもう、工房の裏でべそかいてた子どもじゃない。

立派な一人前の大人で……………背中を預けられる、相棒なんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8543z/>

我は誓う、剣に友に

2011年12月29日12時51分発行